

Sihalavatthupakarana 訳註 (II)

—第1章第3・4・5話—

森 祖 道

目 次
I 序 言
II 翻 訳
第1章第3話
第4話
第5話

I 序 言

A. P. Buddhadatta, ed.: *Sihalavatthupakarana*, Sri Lanka(Ceylon), 1959, xiii & 176 pp.

本書はシンハラ文字で記されたパーリ語の古い仏教説話集である。これはセイロン最古の説話集であるが、一部にインドのそれも含む。かつ本書は種々の歴史的挿話も含んでいるので、その意味ではセイロン(及びインド)の貴重な歴史資料でもある。全体は「正篇」と「続篇」の二部に分かれ、現形は実質77の説話より成る。「正篇」の部分の一部にのみ存する跋文によって、この「正篇」は南インドにおいて Dhammadinna (or Dhammanandi) 師という者によって編纂されたことが知られ、又、「続篇」の部分は後にセイロンにおいて別人の手によって付加されたものと看做される。そして「正篇」の部分の成立は B. C. 2C の終り頃か、1C の初頭頃と推定され、「続篇」の部分の現形成立

は A. D. 4C 頃と考えられる。又、本書の写本は長く主としてビルマに保存されていた様であるが、冒頭に記した如く、近年セイロンで上梓された。

本書に対する研究は、従来、内外共に殆どなされていなかったが、筆者は最近若干の論稿を公表した。即ち、

拙稿(1)：「*Sihalavatthupakarāṇa* について」(『印度学仏教学研究』第21巻第1号，昭和47年12月 所収)

拙稿(2)：「*Sihalavatthupakarāṇa* の資料的特徴」(『インド思想と仏教—中村 元博士還暦記念論集—』春秋社，昭和48年 所収)

なお、次の拙稿(3)も上記の研究と若干の関連を有するものである。

拙稿(3)：「*Mahāvamsa Tikā* に見られる *Sahassavatthu*」(『印度学仏教学研究』第22巻第1号，昭和48年12月 所収)

又、本書の翻訳も校訂者の Buddhadatta 師がシンハラ語の抄訳を出版した以外には、未だいずれの国においてもなされていなかったが、筆者は本年次の部分訳を発表した。

拙稿(4)：「*Sihalavatthupakarāṇa* 訳註 (I)—第1章第1・2話—」(『曹洞宗研究員研究生研究紀要』第5号 昭和48年9月 所収)

そして本稿は上記の翻訳に続く試みであって、第1章の

第3話：Metteyya Vatthu, pp. 10~14

第4話：Mahādatta Vatthu, pp. 15~17

第5話：Manoramamaṃsa Vatthu, pp. 17~19

の三話の訳註である。しかし拙稿(4)の序言でも述べた如く、本書には翻訳上参照し得る他の異本や異版も存在せず、又、註釈書の如き参考文献や他の翻訳もなく、なおかつ本書のパーリ語は標準的なパーリ語と若干相違している場合があったりするので（特に韻文の部分にそれが著しい）、この初訳には種々の困難が伴っている。そのため思わぬ過誤が指摘され得ると懸念されるが、この点は大方の御教示と御叱正をいただきたいと願っている。

さて次には、ここに翻訳する各物語について簡単に解説しておきたい。先ず第3話については、物語の現実の舞台はセイロン島東南部に当る Rohaṇa 地方

である。又、年代について考察すると、死後 Tusita 天宮に上生したと伝説されるセイロンの兄弟王 *Duṭṭhagāmaṇi Abhaya* 王 (在位、B. C. 161—137)¹⁾ と弟の *Saddhātissa* 王 (B. C. 137—119) とが、本物語の非現実的な舞台である Tusita 天宮の場面に揃って登場して来ることから、物語の年代はこの両王の没後の時期と考えられる。この様に物語の現実の場所や年代は極く概略的には判定し得るが実際の具体的な舞台である Kamboja 村とか、そこに登場する現実上の主人公、Māleyya 長老、更にはここに現われる Kumbhakāra 村、Kunṇikāra 村、Tammaṇa 村などという地名に関しては DPPN にも何の記載もない。又、物語の内容そのものも他に類似のものを発見し難い。従ってこの物語そのものは、従来知られていなかった類のものと考えられる。但し物語の Tusita 天宮の場面に現われる Anurādhapura の “tunnāvāya” (仕立屋) と Haritālaka Tissa とは、それぞれ本書の第 1 話と第 2 話の主人公たる人物であり (この両話でもこの二人は死後 Tusita 天宮にそれぞれ再生したとされている)、しかもこの両人も本書以外では従来その名前すら知られていない人物である。これらのことから、この第 3 話は明らかに第 1 話、第 2 話と関連を持って物語られ成立したものと判断出来るのである。

更に本物語の事実上の主人公である Metteyya (弥勒) 菩薩についてであるが、言う迄もなく、この菩薩は Tusita 天宮に住する、いわゆる当来仏、或いは一生補処の菩薩として古来名高い。そして彼に関する伝承や挿話の類は、原始経典を始めとして南北の諸文献に実に数多く現われている²⁾。それらの中で、パーリの Mahāvamsa (Mhv.) には、Duṭṭhagāmaṇi 王が死後、Metteyya 菩薩の住する Tusita 天宮に上生し³⁾、かつ彼は Metteyya 菩薩の第一の弟子であり、彼の父母は同菩薩の父母であり、彼の弟の Saddhātissa は第二の弟子、彼の子の Sāli 王子は菩薩の子であると述べられている⁴⁾。この事実から、Mahāvamsa が Duṭṭhagāmaṇi 王及び彼の一族と Metteyya 菩薩の間の深い関係を認めていたことが知られるが、一方、Sihālavatthu も Duṭṭhagāmaṇi, Saddhātissa 兄弟王を Metteyya 菩薩の随侍者の如き存在として、Tusita 天宮に同時に登場させ、両者の Tusita 天宮における深い関係を認めている⁵⁾。

この様に前述の兄弟王と Metteyya 菩薩の関係を示す挿話には、Mahāvamsa と Sihālavatthu との間に或る程度の共通性が見られ、この共通性は両書の source の共通性に由来するものと解釈出来るのである⁶⁾。なお Sihālavatthu では Metteyya はこの第3話にのみ出て来る。

次には第4話についてであるが、この物語も従来知られていない内容のものであり、その主人公たる Mahādatta という牡牛の名も他には見出されない。又、物語の現実上の舞台は、その冒頭に明記されている通り、セイロンの Rohaṇa 地方であるが、その年代は確定はし難い。ただ、ここに登場する Cūlapinḍapātika Tissa 長老の名によって、一応の年代推定は可能である。そもそも Cūlapinḍapātika Tissa (or Culla°, -°pātiya) については従来知られていない限りでは少なくとも2人の同名異人が存在したと考えられる。即ち1人は Rohaṇa 地方の Gāmeṇḍavālamahāvihāra に住した長老で⁷⁾、他の1人は Girivihāra の長老である⁸⁾。パーリ文献にはこの外に、2ヶ所、同名人の名が現われるが⁹⁾、彼等が上記の2人のいずれかと同一人物なのか否か、或いは彼等2人が同一人物であるのか否かについても、彼等の住所や出身地が記述されていないので、全く不明である。しかしいずれにしても、どの Cūlapinḍapātika Tissa もその年代は不明である。だがしかし、Cūlapinḍapātika (小乞食) と限定的な名称をつける以上、当然その前提となる“Cūla” (小) と限定されない「ただの Pinḍapatika」(或いは Mahāpinḍapātika 大乞食) Tissa がかつて存在し、前者は後者の同時代人が多少なりとも後代の同名人である可能性が大きい。少なくとも前者が後者より前の時代の人であったり年長者であったりすることはない¹⁰⁾。そして歴史上、Ambariyavihāra の“Pinḍapātika Tissa” という人物は確かに存在した。即ち彼が Duṭṭhagāmaṇi, Saddhātissa 兄弟王の父 Kākavaṇṇatissa 王 (B.C. 2C) と同時代の人であることは知られているから¹¹⁾、本書の第4話に登場する Rohaṇa の Cūlapinḍapātika Tissa (彼は多分上記の Rohaṇa の同名人と同一人物と考えられる) も恐らく同王の時代、或いは同王の2人の息子の時代頃の人物と考えられる。因みに本書に登場する国王としては、上記の兄弟王が最も多く、特にこの第1章に関しては全8話のうち、この第4

話を除く他の7話には凡てこの両国王のいずれか1人か、或いは多分彼等と同時代の人物と認められる者が登場しているのである¹²⁾。従って上記の様な Rohaṇa の Cūlapinḍapātika Tissa の登場するこの第4話も、恐らく Kākavannatissa 王の時代か彼の2人の息子の時代の物語と推定され得るのである。更に、本物語の実際上の中心テーマの一つは Mahāsatiṭṭhānasuttanta (大念処経) の功德についてであると考えられるが、この経と本物語との関係について簡単に触れてみたい。本経には冒頭に四念処観が説かれている。言う迄もなく、四念処観の第1は身念処観であり、この観法はわれわれの肉体の内外を観想し、その不浄を観じ、ひいては常・楽・我・(浄)のいわゆる四顛倒を治して、肉体に対する執着を離れしめるものであるから、本経は死に直面し乍らも未だ自己の肉体の存続に執着している者に説示するのに適した経典と言えよう。実際に古来より、この様なことは実行されていたらしく、この点に関して例えば Dr. Malalasekera は次の様に説明している¹³⁾。

Its (=The Mahāsatiṭṭhānasuttanta's) mere recital is said to ward off dangers and to bring happiness, and it is the desire of every Buddhist that he shall die with the Satiṭṭhāna Sutta on his lips, or, at least, with the sound of it in his ears.

そして本物語に見られる Mahādatta の臨終と本経典との結びつきなども、その例証の一つとして挙げ得るものであると考える。

最後に第5話についてであるが、本物語の現実上の舞台は首都 Anurādhapura である。そしてここに現われる人物は、主人公の Manorama(mayūra)-mamsa 長老と “Tissarāja” を除いては、固有名詞を以って表現されていない。このうち主人公たる長老の名は DPPN にも見られないが Tissarāja の方は死後 Tusita 天宮に上生した人物とされているから、彼は Saddhātissa 王と考えると間違いあるまい。何故ならば前述の様に Saddhātissa 王は死後、Tusita 天宮に上生したという伝承が古来セイロンにあり、しかも彼以外に Tissa という名を持つ国王で、この様な伝承を有する者は見当たらないからである。更に物語の主人公の1人として描かれている「或る大臣 (amacca)」とは、

この王の大臣とされているから、本物語の時代は同王の時代と推定出来るのである。そして本物語の内容も同時代の他の文献には類似のものを恐らく見出し得ないものである。

(なお次の翻訳において (P. ……) は原書の頁数を、ゴチックの数字は韻文の番号をそれぞれ意味する。又、[] は訳者が意味を明瞭にするために補ったものである。)

Ⅱ 翻 訳

第1章第3話 メッテヤ物語

(P.10) 次の様¹⁴⁾に聞かれた。タンバパンニ島 (=セイロン島) ローハナ地方¹⁵⁾のカンボージャ村¹⁶⁾にマーレヤ長老¹⁷⁾が住んでいた。長老は午前中に內衣を着、鉢と法衣を整えてカンボージャ村に托鉢のために入った。その時、或る人が8本の青蓮を手を持って村に入りながら長老を見て、それらの花を〔彼に〕捧げた。長老はそれらを受取って考えた：

<〔私は〕どこに捧げようか——大塔にか、それともチューティヤギリ山¹⁸⁾にか、さもなければ大菩提樹にか? >

と。更に彼に次の〔考え〕が起った。

<私は三十三天宮の世尊の右の齒とチューラーマニ (=髻宝珠) 塔廟に¹⁹⁾〔花を〕供えよう>

と考え、その刹那に空中に昇り、弾指の間にヴェージャヤンタ殿の正面に、青い蓮の束を持って立った。諸天神の主サッカは世尊の右の齒と髪舍利とをチューラーマニの内部に含めて、ヴェージャヤンタ殿の前に3ヨージャナの円い塔廟を建立した。長老はその塔廟に近づいて8ヶ所で礼拝し右繞をして一方の隅に立った。サッカは長老を見て従者を伴ってやって来て礼拝して一方の隅に立った。長老はサッカに尋ねた、

「諸天神の主サッカよ、(P.11) メッテヤ菩薩はここに来るでしょうか？」

「はい、尊者よ、今日、〔半月の〕第8日目に来るでしょう。何故ならば彼は半月の第5日目、第8日目、第14日目、第15日目に礼拝のために来るからで

す」と〔答えた〕。この様に彼等が話をしている時に、東の側に大勢の従者を伴った1人の天人が現われた。彼を見て長老は天神の王に尋ねた。

「彼がメッテヤ菩薩ですか？」

サッカは、

「彼は菩薩ではない、彼は別の天人です」

と言った。長老は、

「彼は誰れですか？」

と〔尋ねた〕。サッカは言った。

1. 「彼は前生はアヌラーダプラにおいて針仕事によって生活していて、多くの功德を積んだ有名な仕立屋です²⁰⁾」

と。かの天人はやって来て、南の方向を輝かしながら立った。更に1人の天人が同じく大勢の従者を伴ってやって来た。長老は天神の王に〔同じことを〕尋ねた。サッカは、

「彼は菩薩ではない、別の天人です」

と〔答えた〕。

「彼は誰れですか？」

サッカは言った。

2. 「〔かつて〕ハリターラ大村に大施主がいて、ハリターラのティッサ²¹⁾と〔言われた〕。彼も又この世界に来ているのです」

と。かの天人はやって来て西の方向を輝かしながら立った。更に1人の天人が同じく大勢の従者を伴ってやって来た。彼を見て長老は天神の王に〔同じことを〕尋ねた。サッカは、

「彼は菩薩ではない、別の天人です」

と〔答えた〕。

「彼は誰れですか？」

サッカは言った。

3. 「彼はドウッタガーマニ・アバヤの弟で、サッターティッサという名前によって大いに名声のある〔者〕であり、彼も又この世界に来ているのです」

かの天人はやって来て北方を輝かしながら立った。更に1人の天人が彼の後から同様に大勢の従者を伴ってやって来た。〔長老は〕彼を見て天神の王に〔同じことを〕尋ねた。サッカは、

「彼は菩薩ではない、別の天人です」

と〔答えた〕。長老は

「彼は誰れですか？」

サッカは言った。

(P.12) 4. 「彼は如来の塔を島の pajjara²²⁾ に作った ドウッタガーマニー・アバヤであって、彼も又この世界に来ているのです」

と。かの天人はやって来て東の方向を輝かしながら立った。

彼等の後からメッテヤ菩薩がやって来た。彼の四方を4人の天女たち²³⁾が従者を伴い飾り立ててやって来た。〔彼女たちは〕最高の姿体をもち燃え輝く火の様であった。かの天女たちを見て長老は天神の王に尋ねた。

「4人の可愛い彼女たちは人間の世界でどんな福德をなしたのでしょうか？彼女たちの中で、1人は多色の容色で、多色の光を放ち、多色の飾りをつけ、多色の衣装を着ており、1人は赤色の光を放ち、赤色の飾りをつけ、赤色の衣装を着ており、1人は黄銅色の容色で、黄銅色の光を放ち、黄銅色の飾りをつけ、黄銅色の衣装を着ており、1人は黄色い容色で、黄色い光を放ち、黄色い飾りをつけ、黄色い衣装を着ておりますが……」

天神の王は語った。

5. 「王国の建設の時に、陶工の村においてかの天女は様々な色の花を献じて南〔側〕に立ちました。
6. ナーガディーパにおいて、かの長老尼は自ら青蓮を乞うて、塔廟に献じ、そして彼女は北側に立ちました。
7. ランカー (=セイロン) の〔或る〕地方でカンニカーラ²⁴⁾の村人たちにカンニカーラ (=黄花樹)の花を献じ、後に彼女は南〔側〕に立ちました。
8. そ〔の村〕の近くに前生いた者²⁵⁾はタンマナの²⁶⁾村人たちに供養として銅の旗を作り、後、彼女は北〔側〕に立ちました。

9. 多くの天人たちも可愛い天女たちもメッテヤ菩薩に随従して空中にまでも行った。
10. 「彼は」満月の時の月の如く、秋の太陽「の如く」色あざやかな火によって天神の間に光輝いている。
11. 獣類中の獅子の如く、牛「の群れ」の牛王の如く、山「山」の中の須弥山の如く、天神の間に光輝いている。
12. 鳥類中のガルラの如く、河川の中の大海、樹木中の珊瑚樹「の如く」、天神の間に光輝いている。
- (P. 13) 13. 花類中の紅蓮、宝珠類中の玻璃、人間の中の転輪聖王「の如く」天神の間に光輝いている。
14. 山頂の火の如く、黄金の耳環の如く、凡ての天神たちに優り、色あざやかな火によって「彼は」輝く。
15. この様に最高に美しいかのメッテヤは勝者(=仏)の最上なる者であり、凡ての天神の集団の中に光輝きつつやって来た。
- かの4人の天女たちは人間界に生きていた間に、花環等の供養をし、それ故死後、トゥシタ天宮に生まれ、何百もの従者を伴って菩薩に随従して来て3ヨージャナの円いチューラーマニ塔廟²⁷⁾に礼拝し右繞をなしてマーレヤ長老のそばに行き、マーレヤ長老に礼拝して一方の隅に立った。
- メッテヤ菩薩はマーレヤ長老に尋ねた、
- 「尊者よ、どこから来ましたか？」
- 「大王よ、ジャンブディーパ(=人間世界)からです」
- 「尊者よ、ジャンブディーパの人々の必要なものはどうですか？」
- 「大王よ、必要なものはあります」
- 「尊者よ、必要なものとは何ですか？」
16. 「[あなたが] およそ如何なる善業をなさうとも [人々は] あなたに対して菩提について望んでいます。[又] 常にわれわれに対してはメッテヤ等正覚者を見ることあれ、と [望んでいます]」

菩薩は言った。

17. 「およそ如何なる善業をなそうとも人々は〔私が〕輪廻の恐怖を恐れている人々の生存を脱せしむる者であることを私に望んでいる。
18. 恐しい無明の城、渴愛の網の中で狂乱して連れられて来る世界を四つの暴流より私は濟度しよう
19. 煩惱の渦に没入する時、渴愛の盜人に従う時、輪廻の河に迷乱する時、善き道を私は示すだろう。
20. 等活、黒繩、焦熱、大焦熱、無間地獄²⁸⁾における凡ての衆生に私は涅槃を得させよう²⁹⁾。
21. 無知の束縛によって縛られている時、渴愛の網の力に抑えられている時、〔その〕束縛を切断して、凡て〔の人々〕に〔私は〕涅槃を得させよう。
22. 邪見の扉を、六十二見の門を、道を開く最上の鍵をもって〔私は〕生命ある者を開くだろう
- (P. 14) 23. 貪りと瞋りによって暗黒で暗愚となっている〔人々〕、眼を破壊された人々に対して、智慧の器具を与えて私は〔彼等の〕眼を浄め拭おう。
24. 憂い、悩み、苦しみ、そして老と死とに悩まされている生命ある者に、最高の智慧の明星を与えて〔私は〕治療しよう。
25. 愚痴、暗黒、昏迷の中で様々な行為を人が行なう時には、智慧の世界を作って〔私は〕彼に〔わが〕家を開放するだろう。
26. 世界において、救済されない場所、彼岸でない場所を転々としつつある者を方便をもって引き揚げて〔私は〕彼岸を示すだろう」
- と。〔菩薩は更に語った〕
27. 「汚れたる比丘尼と比丘たちは僧伽の破壊者であり、かつ五無間業 (= 五逆罪) を〔なし〕塔と菩提樹³⁰⁾の破壊を〔なす〕。
28. 私の周辺には菩薩を殺すこと、慳悋、虚言は存在しない、私が語った私のことを、実に、その通りに人間界に赴いて生命ある者に語るべきであろう」と。以上のことを語ってメッテヤ菩薩は長老に礼拝して後トゥンタ天宮を去り、長老も又戻ってタンバパンニ島に到達した。長老はカンボージャ村に托鉢のために入り、それ以来〔彼は〕親族のものたちに〔以上のことを〕語った。

親族のものたちも又、長老の教誡を聴いてそれら一切の善業をなした。かの人人は寿命が尽きた時、人間界より死去して天神界に到達した、と〔言われる〕。

29. 天神のために³¹⁾無数のものを積み、多くの善業を積んで〔天神界に〕赴いて智慧の円熟した正覚に到達するだろう。

30. 〔彼は〕正覚に到達し了って生命ある者を憐み、法の船を仕立てて天神と共なる者を渡すだろう。

31. この法の船に乗船して輪廻より出離し法を喜ぶ比丘にかの涅槃の得達がある。

32. かくして殊勝なる大士メッテヤ等正覚者は、未来において凡ての生命ある者に対して帰依処となるであろう、

と。

メッテヤ物語 第3(終り)

第1章第4話 マハーダッタ物語

(P. 15) 次の様に聞かれた。タンバパンニ島ローハナ地方に或る車夫が〔いた〕。彼は砂糖³²⁾を一杯積んだ荷車を引いて深い泥土に落ちた。荷車は泥土の真中で動かなくなった。それをマハーダッタという名の一頭の牡牛は牽くことが出来なかった。車夫はこの様に言った。

1. 「深い泥土の中で、今もしお前が〔荷車を〕牽き揚げるならば、二度と再び〔私はお前を〕軛に付けない、とこの様に知れ、馴されたるものよ！」それを聞いてマハーダッタは張切って動き廻り、懸命に努力して牽き揚げるべく頑張った。車夫は牡牛をつかんで励ました。牡牛も又全力を尽して荷車を牽張った。この様に六度、嘘をつきつつ〔車夫〕は〔泥土〕を渡らしめた。そして七度目の時になっても牡牛は良く努力したけれど駄目であった。そして年老いて力が弱っていたので牽いていた〔牛〕の胸が急に破れ、彼は血を吐いて倒れてしまった。彼〔車夫〕はそ〔の牛〕を捨て、別〔の牛〕を軛して出発した。〔そこへ〕或る陶工がやって来て、未だ生きている彼の皮を剥ぎそれで〔陶土を捏ねるために立ち去った。〔そこへ〕或る音楽師がやって来て、絃楽器を

作るためにもろもろの筋腱を切り取って行った。更に又、或る獵師が獵犬たちをつれてやって来て、肉を切り取って犬たちに与えた。犬たちも色々な肉を口で引きむしって食べて行ってしまった。〔なお〕生きている〔牛〕の身体を黒蟻たちが食べた。大きな苦痛をなめた彼は横たわっていた。

その時、チューラピндаパーティカ・ティッサ長老³³⁾は500人の比丘たちと共にその道を歩いて来て、その牡牛を見て悲愍〔の情〕を起し鉢に水を運ばせて飲ませた。牡牛も又欲するだけ〔水を〕飲んで蘇息を得た。長老はか〔の牛〕の前に坐り大念処経³⁴⁾を説いて帰依処を与えた。

(P.16) 長老の諸戒が与えられている時に、牡牛は息を引きとりながら法の実相を把握して三十三天宮の30ヨージャナの黄金の宮殿に生まれ1,000人の仙女たちに従侍された。〔彼は〕前生を知って長老の悲愍³⁵⁾を示すために真夜中に1,000人の仙女たちに従侍されて宮殿もろともやって来て、長老の足下に倒礼して一方の隅に立った。長老は何も知らない者の如く尋ねた、

2. 「端正で魅力があり美貌に輝いていて、その周囲を仙女の集団が入り乱れて囲んでいる人、尊師よ、あなたはいったい誰れですか？」

天人は言った、

3. 「昔、苦界より再生した牡牛がいました。〔その〕私は愚痴の領域に入って善業を自証しませんでした。

4. 深い泥土の真中の荷車に私を軛していた時に、荷車を牽き揚げようとしていた人は私の心臓を引き裂きました。

5. 荷車が将に牽き揚げられようとした時、あの様に私は倒れました。倒れて力の弱った〔私を〕見て、主人は〔私を〕捨てて行ってしまいました。

6. どこの残酷、無慈悲な人々が生きている私の皮、肉、筋腱³⁶⁾を引き奪って行ったのでしょ。う。

7. この様な厄難に遭遇した者を見て、慈悲深い尊師は大牟尼念処経³⁷⁾をお説き下さいました。

8. 経〔の説示〕が終った時、〔尊師は〕私に諸帰依処をお与え下さいました。〔ついで〕諸戒を授けられていた私に死が訪れました。

9. そこで私は臨終して三十三〔天宮〕に上昇しました。もし諸戒をお授け下さらなかったならば³⁸⁾、私はヤマの世界にいたでありましょう。
10. 〔そして〕天神界に來た者の前生の名前も又消滅してはいません。〔即ち〕〔私のことを〕“マハーダッタ”であるとインダと一緒にいる天神たちは知っています。
11. 私が牡牛であって苦しみを得て大変狂暴になっていることをお知りになって〔尊師は〕経を丁寧にお説きになり帰依処を私にお授け下さいました。
12. 耳に入った〔説示〕の結果を〔私は〕この様に考えます。1,000人のかの仙女たちが私に従侍しています。〔そして〕〔私は〕その様な吉祥なる経を傾聴して得達者となったのです。
- 〔P.17〕13.³⁹⁾ 男でも女でも、常に教説を尊ぶ者、彼等には〔なお〕説かるべき〔教え〕が存在するが得達者たちの最高の樂福は〔未だ〕存しません。
14. 〔あなた様は⁴⁰⁾〕帰依処と諸戒をお授け下さって、かの経をばお説き下さい。〔そして〕かの法の船に乗って有の海を通過して私を〔彼岸に〕お渡し下さい。
15. かの経の威力と戒と帰依処とによって私は苦界の身体を捨てて天神の身体を獲得しました。』
16. この様に有との結合より離れたかの天人マハーダッタは、かの長老に念処〔経〕の説示を乞い求めた。
17. 大自在長老は諸帰依処と諸戒を授け、かの経をば説示して初果について教導した。
18. 彼(=天人)は法輪を得て仏子(=長老)の面前で〔その〕兩足に低頭して礼拝をした。
19. 1,000人の仙女たちと共に預流果に達した彼は白鳥王の如く⁴¹⁾、神の住処に向って空中を進んだ。
20. それ故、如来たちは善き人々との交流を賞讃し、そしてその法の喜悅を聞いて、更に更に多くのものが賞讃した。
21. 賢き者は、実に多くの功德が生まれると知って、善き人々の集まりの中にい

る者、[彼を] 賞讃すべきであり(?)⁴²⁾又、阿修羅の如き類を多く捕え(?)⁴²⁾
[その類は] この様なたぐいの(?)⁴²⁾善き人に従うべきである、と。

マハーダッタ物語 第6⁴³⁾(終り)

第1章第5話 マノーラマ・マンサ物語

(P.17) 次の様に聞かれた。アヌラーダプラにおいて或る若い沙弥が、[自分の師匠が食事をしている時に、葉付きの花⁴⁴⁾を捧げて誓願をした：

1. 「尊師よ、私のこの福德と心の諸誓願とによって[私は] どこにでも再生するであります、孔雀の肉に栄えあれ！」

(P.18) と。彼は死んでその[同じ] 町の或る家に再生した。彼が生まれた日より後には、その家には常に孔雀の肉が生まれ、このことによって彼には“マノーラマ・マヌーラマンサ”(喜ばしい孔雀の肉という意) という名前がつけられた。彼は次第に成長して家より出家した。彼には又、孔雀の肉が生まれた。或る日、或る大臣が孔雀の肉を得て、長老を招請して家に案内し席に坐らせて食事を施しめた。しかし[彼の] 妻は彼が得た肉を少しだけ施したかった。少しだけ取ろうとしていた[彼女] は全部取り出してしまった。彼女は[少しだけ] 分けることが出来ない、全部を長老にさし出し(?)⁴⁵⁾それを見てマノーラマ・マヌーラマンサ長老は微笑を浮べた。大臣は長老に微笑の理由を尋ねながら

2. 「持戒している出家者で六根を防護しているかの者達は、如何なる理由を認めて微笑を浮べるのですか

3. 孔雀の肉を見て貴師は微笑を浮べたのですか、私はそれを伺いたいのです。私に微笑の理由をお話し下さいませんか？」

長老は言った

4. 「彼女は私の福德を知らないで、少しだけ[孔雀の肉の] 施しをしたがりました。[それなのに] その全部が落ちて来たのを見て、私は微笑を浮べたのです。

5. この世で、物惜みをする人々は全部を与えません、福德を持っている人を

見て物惜みをする人には貪りの苦⁴⁶⁾が存します。

6. 私によってなされた福德が如何に些少であっても、それらに対して供養すべき時に、その福德が今眼の前にあるのに、彼女は「なおその」機会を探し求めています。

7. 「この様な」恪な女を見て私は微笑を浮べたのです。この理由を理解して下さい。「そして」貴方は他「の理由」を考えないで下さい」

大臣は「長老の福德を知りたい」と「考えて」翌日「彼を」招請して、屑米の御飯と酸粥の副食⁴⁷⁾とを妻に命じ外に出掛けた。町の守護神は人間に変装して美味しい孔雀の肉と米飯と酪とバター⁴⁸⁾とを彼「=大臣」の妻に与えて次の様に言った。

(P.19) 8. 「この孔雀の肉と酪とバターとを、奥様、大臣は『料理して比丘にさし上げよ』と「言って」つかわしました」

と。大臣の妻はその全部を見て思った

9. 「大臣は私を制してあの時外に出掛けて行ったが、しかしこの様な[品々]を見て、私に対する十分な思いやりからあの人は浄信ある者となったのでしよう(?)⁴⁹⁾」と。

10. 「そこで彼女は」喜んで受取って、孔雀の肉と酪とバターと米飯を美味しく料理して長老にさし上げた。

11. そこで長老は席に坐り、期待していた様なその食事を食べ了って帰って行き

12. 「又」かの大臣は帰宅して妻に尋ねた

「私が言いつけたあの屑米の御飯をお前は凡て言いつけ通りにしたのか？」

13. 彼女は彼の言葉を聞いて大臣に次の様に言った。

「[貴方は] 始めに言われたことを後になって変更されました」

大臣は言った

「私は二度目には何と言ったと言うのか？」

彼女は言った。

14. 「貴方がお言いつけになった凡てのもの、[つまり] 米飯と肉と酪とバター

- を料理して美味しく作ったその食物と飲物をあの尊敬すべきお方に〔施しました〕」
15. これを聞いて、その時、かの大臣は全く驚いてしまった。〔彼は〕浄信を
 広大にして様々なことを語った⁵⁰⁾、
16. 「ああ、日種族の仏によって立派に説示された法は、在家者出家者たちの
 助けであり福德である。
17. かの善き人によってこそ、善〔業〕はなさるべきであり、孔雀の肉を見て
 その様な〔善業〕の結果は明白である。
18. 〔即ち〕私は屑米の御飯を酸粥と共に命じて出掛け、そして米飯と孔雀の
 肉とを天神は家に持って来た」
19. 法を喜ぶ者には、法の究極においてなすべき善がある。そこで大臣は満足
 して大施主となった。
20. かくて、多くの人間の君主であってトゥシタ天城に赴いたティッサ王の最
 高の大臣は、この世で多くの善〔業〕を積み、死後、素晴らしいトゥシタ天城
 に赴いたのである。

マノーラマ・マンサ物語 第7⁵¹⁾ (終り)

〔註 記〕

(本稿中のパーリ原典は特記のない限り、凡てPTS版である)

- 1) セイロン王の在位年代は凡て C. W. Nicholas & S. Paranavitana: *A Concise History of Ceylon*, Colombo (Ceylon University Press), 1961 中の最新の説 “A Chronological List of Ceylon Kings” に依った。
- 2) 『望月仏教大辞典』第5巻 pp. 4815~19 (弥勒菩薩の項)
- 3) *Mahāvamsa*, chap. 32, vv. 70~77.
- 4) *ibid.*, chap. 32, vv. 81~83.
- 5) なお、この兄弟王の Tusita 天宮上生の場面は本書中にも見出される。即ち兄王については第42話 *Duṭṭhagāmaṇiraṇṇo Vatthu* (p. 114, v. 46 ff.) に、又、弟王については第8話 *Saddhātissaraṇṇo Vatthu* (p. 35, v. 24 ff.) にそれぞれ見られる。
- 6) この両書の関係については、前述の「拙稿(2)」の「第2節 史書類との関係」を参照のこと。
- 7) *Manorathapūraṇī*, vol. 2, p. 215.
- 8) *ibid.*, vol. 1, p. 35 f.

- 9) *Visuddhimagga*, vol. 1, pp. 116 & 191.
- 10) 2人の同名異人に“Mahā”と“Cūla, Culla”という限定辞を冠して両者を区別するという用例 (Mahā はつけない場合もある) については、拙稿「チュッラ・ブッダゴースの研究」(『城西経済学会誌』第7巻第1号) pp. 300~301 参照。
- 11) *Manorathapūraṇi*, vol. 2, p. 60ff.
- 12) 拙稿(1) p. 435.
- 13) G. P. Malalasekera: *Dictionary of Pāli Proper Names*, London, 1960, vol. II, p. 564 (*Mahāsatipatṭhāna Sutta* の項)
- 14) 原文 *Eva manusuyyate* は明らかに *Evam anusuyyate* の誤まり。
- 15) セイロン島東南部地方の古名。古代セイロンの三大地方区分の一つで、その首都は *Mahā-gāma* (現在の *Tissamaharama*) であった。Anurādhapura を外敵に占領された時には、シンハラ王朝や仏教々団はこの地方にしばしば避難した。
- 16) Rohaṇa 地方の Kambojagāma というのは DPPN には見られない。又、テキストの脚註によれば、異本には Kammojagāma とあるが、この名称も同じく DPPN にはない。なおこれは本書でもこの物語にだけ出てくる。
- 17) この長老の名も DPPN には見られない。
- 18) 原語は *Cetiyagiripabbata*. DPPN には *Cetiyagiri=Cetiyapabbata* とあるが、上記の様に重ねて表わすのは珍しい。本書ではここ以外に pp. 30, 31, 47, 140, 145, 150 に同名が出てくるが凡て *Cetiyagiri* となっている。
- 19) 三十三天の *Cūlāmaṇicetiya* に関しては、諸文献に興味のある挿話が散見される。先ず *Jātaka* (vol. 1, p. 65) には世尊のターバン (*moli*) と髻 (*cuḷā*) とを長さ1 ヨージャナの室函に納めて、Sakka が *Cūlāmaṇicetiya* を建立したと記述されている。又 *Buddhavamsa-aṭṭhakathā* (p. 283—284) にもこれと殆ど同一の文章が見られる。更に *Digha-aṭṭhakathā* (vol. 2, p. 609) によれば、後に Sakka は世尊の右の歯 (*dakkhīṇa-dāṭhā*) をそこに追納した。一方、*Mahāvamsa* (chap. 17, v. 20), *Mahāvamsa-ṭīkā* (vol. 2, p. 376) 等には世尊の右歯の代りに右の鎖骨 (*dakkhīṇa-akkhaka*) が納められていたことになっている。ところで本書では、右歯と髪舍利 (*kesadhātu*) とがその *Cetiya* に納められたとされているから、この点に関しては *Digha-aṭṭhakathā* の記述に近いと言えよう。
- 20) 「序言」でも述べた如く、この仕立屋 (*tunnavāya*) は本書第1話の主人公 *Tissa tunnavāya* であろう。
- 21) この *Tissa* も「序言」で述べた如く、本書第2話の主人公たる *Haritāla(ka) Tissa* であろう。
- 22) 原文はゴチックで “*dipapajjare (?)*” となっていて、校訂者もその意味が理解出来なかったようである。
- 23) 原文 *devakaññāyā* は *devakaññāyo* の誤まり。
- 24) *Kaṇṇikāra-gāma* は DPPN に見られない。
- 25) 原文 “*tamhā passena yo pubbe āsi.....*” を *tamhā passena yā pubbe āsi* と

解する。

- 26) Tammaṇa-gāma も DPPN に見られない。
- 27) 原文 Cūlamanīcetiya は明らかに Cūlāmanīcetiya の誤まり。
- 28) ここにはいわゆる八大地獄 (aṭṭhamahāniraya) 中、衆合 (saṅghata) と二つの叫喚 (dve Roruvā) の三地獄を除いた五地獄が列挙されている。これらに対しては *Jātaka-aṭṭhakathā* (*Jātaka*, vol. 5, pp. 270~271) に詳しい説明が存する。なお南伝36巻276頁, 註6~12; 63巻171頁, 註19参照のこと。
- 29) この偈文の末尾は “nibbāpayissa’ha.” とあるが、これは “nibbāpayissam’ahaṃ.” と解する。前後に 3ヶ所 “~issa’haṃ” という文が見られる。
- 30) 原文 thūpabodhīna は thūpabodhinā の誤まりと解する。
- 31) 原文 dveaṭṭha は前後に意味の通ずる訳は困難である。ここでは deva-atthaṃ と解した。
- 32) 原語 guḷa には、玉、珠、砂糖、房群、鎖など多くの意味があるので、ここでは実際に何を意味するのか正確には不明である。
- 33) Cūḷapiṇḍapātika Tissatthera. 彼については「序言」参照。
- 34) *Mahāsatiṭṭhānasutta: Dīghanikāya* No. 22(vol. 2, p. 290 ff.) cf. *Satiṭṭhānasutta*, *Majjhimanikāya* No. 10 (vol. 1, 55 ff.); 『念処経』中阿含第98(大正1巻582頁中); 四意止, 増一阿含第12-1(大正2巻568頁上)
- 35) 原語 kaññutaṃ は kāruññataṃ と解する。
- 36) 原語 nhāru は nhāruṃ と解する。
- 37) 原名 *Mahāmūnisatiṭṭhānasuttanta*, 本経は明らかに前出の *Mahāsatiṭṭhānasutta* のことであるが、正確にはこの様な具名は現在の一般のテキストには存在しない。
- 38) 原文は yadi silāni dajjeyya とあるが、意味上、“na” が脱落したものと考えて、yadi silāni na dajjeyya と解する。
- 39) 原文 (p. 17, l. 1) には “14” とあるが、これは明らかに “13” の誤まり。
- 40) ここには主語が示されておらず、対応する動詞は bhāsatha で *imper., 2 pl.* の形であるが、複数形で尊敬の意を表現する例(特に1・2人称に多い)と理解され、意味上は 2 sg. である(水野弘元『パーリ語文法』p. 82 脚註参照)。
- 41) 白鳥王 (Haṃsarāja) が空中を行くという表現は *Apadāna*, pp. 70 & 92 などにも見られる。
- 42) この3ヶ所の “(?)” は校訂者が付したものである。
- 43) 原文には “Mahādattavatthu chaṭṭhaṃ (?)” とあって写本の物語番号が飛躍していることが示されている。本書の p. 135 には第1話~第50話(いわゆる「正篇」)の部分の目次に当るものが見られる。それによれば、現在の本書の第1章の八つの物語は、その目次の第3話~第10話に相当し、第1・2話が欠けている。恐らく本来はこれら冒頭の2話を加えて第1章の全10話が構成されていたものと考えられる。従ってこの「本来の目次」によれば、この第4話は本来の第6話に相当し、上記の「末尾の番号」の方が正当であることが知られる。なお詳しくは拙稿(1) p. 435 の「表」参照のこと。

- 44) 原語 kusuma-paṇṇāti は kusuma-paṇṇāni の誤まり。
- 45) 原文は “.....sabbam therassa chupi (?)” とある。
- 46) 食りの苦, 原語は “tibbarā (?)” とあって校訂者も正確に理解出来なかった様であるが, これを tibbarāga と解してこの様に訳した。
- 47) 屑米の御飯と酸粥の副食, 原語は kaṇājakam bilaṅgadutiyam. この両語を合わせた同様の表現は, *Vinaya*, vol. 2, p. 77; *Saṃyutta*, vol. 1, pp. 90 & 91; *Aṅguttara*, vol. 1, p. 145, vol. 4, p. 392; *Jātaka* vol. 1, p. 228, vol. 3, p. 299; *Dhammapada-aṭṭhakathā*, vol. 3, p. 10, vol. 4, p. 77; *Vimānavatthu-aṭṭhakathā*, pp. 222 & 298 などに見られる。但し *Jātaka*, vol. 5, p. 230 には kaṇājakabhattam とだけある。
- 48) 酪とバター, 原語は dadhighaṭam (酪の瓶) となっているが, これは dadhighatam の誤まりと解した。原典 p. 19, l. 15 にはこの様にある。
- 49) 原文は “.....passanno me matipuṇṇeti (?)” とあって, 校訂者も疑問を持ったことが知られるが, 今は “pasanno me matipuṇṇā iti” と解して訳出した。
- 50) 原文 “vacibheda mudirayi” は “vacibhedam udirayi” の誤まり。
- 51) 原文には Manoramamaṃsavatthu Sattamaṃ” とあって, ここでも第4話の末尾の番号に続いて物語番号の飛躍が見られる。この飛躍の理由などは第4話の場合と全く同様であると考えられるので, この点に関しては註(43)を参照のこと。

The Sihalavattupakarana

Sodō Mori

A. P. Buddhadatta, ed.: *Sihalavattupakarana*, Sri Lanka (Ceylon), 1959, xiii & 176 pp.

This is an ancient collection of Buddhist legends written in the Pāli language in Sinhalese letters. It is the oldest one of its kind in Ceylon, but it also contains some of the legends of India. As it contains various historical episodes, it is also a valuable document in the histories of Ceylon and India. It consists of 77 legends in all divided into 2

parts, which I named the principal and the sequel.

Through the colophones which are found only in the principal part, this part is known to have been collected in South India by a Buddhist monk named Dhammadinna (or Dhammanandi). The sequel was added later in Ceylon by an unknown person. By the proper names appearing in the work, it can be assumed that the former part was compiled at the end of the 2nd century B.C. or in the beginning of the 1st century B.C., and the latter part in the 4th century A.D.. The manuscripts of the work seem to have been preserved for a long time primarily in Burma, but they were published recently in Ceylon.

A thorough comparison shows that some legends of the *Sihālavatthu* resemble some descriptions found in the so-called Vamsakathās in Ceylon, such as the *Dīpavamsa* and the *Mahāvamsa* and the *Mahāvamsa-ṭīkā*, as well as some descriptions found in the Pāli Aṭṭhakathās, such as the *Visuddhimagga*. This suggests that at least some of the sources of the *Sihālavatthu* are the same as those of the Vamsakathās and the Aṭṭhakathās. These sources are generally considered to be what are called the Old Sihāla Aṭṭhakathās, *i. e.*, the *Sihāla-Aṭṭhakathā* of *Mahāvamsa*, the *Mahā-Aṭṭhakathā* (or *Mūla-Aṭṭhakathā*) and others. At least we can say that the content of the *Sihālavatthu* is similar in part to Pāli works of ancient times.

We are able to find in the text many known proper names, chiefly those of Ceylon. Some of the informations supplied about them agree with what we already knew, but some was previously unknown. The former supports and strengthens our present knowledge; the latter, like the many unknown proper names mentioned below, adds something entirely new. Some portions of the collection have no identity in content with any part of the Pāli works already known. The collection also

contains many proper names which can not be identified even by consulting Dr. G.P. Malalasekera's *Dictionary of Pāli Proper Names*, which is the largest one of its kind. This means that some parts of the *Sihalavattthu* were drawn from sources independent of those of the known Pāli works. Some of these sources might be oral narrations.

Until recently, we have had no notable researches on this work and no translations into any modern language except a Sinhalese partial translation by Rev. A.P. Buddhadatta, the editor of the present edition under consideration. But of late I have published a few papers in Japanese and a Japanese translation with notes of some of the legends. They are as follows:—

- 1) "On the *Sihalavattthupakarāṇa*" (『印度学仏教学研究』 or *The Journal of Indian and Buddhist Studies*, vol. XXI, part 1, Tokyo, 1972).
- 2) "Some Documental Characteristics of the *Sihalavattthupakarāṇa*" (『インド思想と仏教——中村 元博士還暦記念論集——』 or *The Indian Thought and Buddhism—A Felicitation Volume presented to Prof. Dr. Hajime Nakamura on his 60th Birthday—*, Tokyo, 1973).
- 3) "The *Sahassavattthupakarāṇa* found in the *Mahāvamsa-ṭīkā*" (『印度学仏教学研究』 or *The Journal of Indian and Buddhist Studies*, vol. XXII, part. 1, Tokyo, 1973).

Although this paper does not discuss the *Sihalavattthu* in detail, there are some references to it.

- 4) "A Japanese Translation and Notes of the *Sihalavattthupakarāṇa* (I)—Chapter 1, Story Nos. 1 • 2—" (『曹洞宗研究員研究生研究紀要』 or *The Journal of Sōtō Sect Researchers*, vol. 5, Tokyo, 1973).

The present article in Japanese in this Journal is also a Japanese translation, with notes and an introductory essay, of the 3 legends following the above, which is entitled as follows:—

- 5) “A Japanese Translation and Notes of the *Sihalavattthupakarāṇa* (II)—Chapter 1, Story Nos. 3 • 4 • 5—”.

(I note here with much appreciation that Dr. Mrs. Noriko Mizuta Lippit, Associate Professor of our University kindly improved my original draft in English.)